

牧口教育思想と生活知

近代宗教運動論の視点から

島園 進



生活知の重視

私は宗教学を勉強しておりますが、特に近代の日本の民衆宗教運動、いわゆる新宗教に关心がございます。前から創価学会という新宗教の創始者である牧口常三郎が大変重要な思想家、宗教家であると感じてきました。しかし、牧口の主著とされる『人生地理学』も『創価教育学体系』も大部なものであります。いろいろ面白いところがあるのですが、何が牧口の思想の核心的なもので、何が私に響いてくるのかということが、もう一つつかめじた次第です。

郷土科という科目、今の生活科のアイディアの元になつたものと聞いております。ドイツあたりではかつて実際に行われていたようであります。日本では牧口らの提案にもかかわらず、かつては行われませんでした。牧口には先見の明があつたわけですが、しかも牧口はこれを全教科の基礎になるもの、として計画した。個々のバラバラの教科でなくて、全教科の基礎となるもの、子供の人格形成の最も基盤に置かれるべきものとして考えたわけであります。それは、生活環境の中で、子供たちが生活している身の回りの事物、関係、社会の中でものを考えいく、観察し、人々と接し、自らの力で考えていく。そういうことを目指す学科として、郷土科を考えました。つまり、ここで目指されているものは、生活に根ざした知識であり、また、生活に応用できる知識であります。したがって、皆が関心をもつことができ、身近で

ないでいたわけであります。特に地理学の書である『人生地理学』と、教育学の書である『創価教育学体系』、私はどちらも専門でありませんし、何が地理学と教育学の両方を貫いているのであるか、ということが見えなかつたわけです。

ところが、全集が発刊されたりいたしまして、牧口の著作に目を通しやすくなつてしまひました。私もボチボチとひととき始めたわけであります。その中で、『教授の統合中心としての郷土科研究』という著作を読みまして、ここだなと思いました。ここから、『人生地理学』

あるから面白い。そして、喜びを伴つた学習ができる、そういうはずのものと考えた。そういう領域ですので、大多数の子供たちが自発性をもつて参加できる。そして、その教科においては先生があれこれと口出すものではなくて、子供が自発的に学び、自立する力と意志を育てていくのを先生が手助けする。そういう形での教え方が必要である。そういう自発的なしかも楽しい学習であるからこそ、身についた知識になる。そういうことができなければ、多くの知識が上からの教え込み、知識の注入になつてしまふであろう、そういうふうに説きました。

そこから振り返つてみると、実は、『人生地理学』の「人生」という言葉も、人間の生活と結びつけて地理、環境について考える、そういう学科として地理学を考えた。「人生」地理学という牧口独特の言葉をつくられたのもそういう考え方によるものです。また、創価教育、価値創造の生活を子供たちに学びとらせていく、という『創価教育学体系』の主張も同じ考え方に基づいたもので、生徒達の自発性に基づいて、生活の中での知識を生徒自身が育していく。それを先生が助けていくと、そ

いう思想が根本にあることが分かること思います。

それを一口で言うと、「生活知を重んじる教育」、あるいは「生活知を開発していく教育」と理解できると思います。その場合に、近代以降、我々が生きている時代で、生活知というものが、どういう位置に置かれているか、そういうことを考える必要があるであろうと思います。

そして、生活知が何故、教育で生かされないのか、何故、学問的知識や教育が生活知から遊離してしまったのか、というより、学問はもともと生活から遊離する、そういう可能性を本来持っているのではなかろうか、そういうふうに考える 것입니다。

私が郷土科の考え方非常に引かれるものを感じた理由は、私自身が宗教学という学問をやつておりまして常に考えてきたことは、生きている宗教から離れない宗教学というのが可能であるかということでありました。

宗教についていろいろな学説がある、理論がある。しかし、それが生きている宗教生活から離れたものになってしまっては、本当の学問とはいえないのではないだろうか。というよりも、私自身にとって、本当の意味で響くと思われます。

抽象化する。また、現実の知識を確かなものにするために、専門的に細かい知識を蓄積しようとする。そういうことが行われるからであります。そういうことが行われるたびに、現場から遊離するという危険がまっていると思われます。

したがって、これは小学校の段階から大学の段階まで、常に、学問的に厳密に考えたり、抽象化して考えたりする。あるいは細かい知識をしっかりとまとめていくといふことと、生活に根ざした生活感覚から遊離しない思考をしていくことを、どう結び付けていかが大変難しい問題だと思うわけです。それに対して牧口常三郎という人は始めから、教育実践と地理学から教育学に到る牧口学の全体の課題として正面から取り組んだ。そういう思想家として近代日本では際立っていると思うわけです。学問思想家としても大変重要な意義のある仕事をなされたと思います。

近代においては、ある意味では生活に根ざした知識を育てる可能性が出てきた、とも言えると思います。というのは伝統的な社会では多くの人が学問から切り離され

てくるものがない、そういうふうに感じていたわけあります。ですから、私の考へている宗教学のやり方は、本で勉強する必要もありますが、できるだけ、現場へ出かけていく。それを私は、現場主義と言つております。そして、自分とは違う立場、環境におられる方々と接する。対話的な場面ができるのですが、そういうところで、教えていただく、対話するというやり方をしてまいりました。そういうやり方を、学問の世界では調査といつたりするのですが、いかにも一方的で感じが合わない。また、フィールドワークと言つたりしますが、それもなにかバタ臭い。ですから、現場主義といった言葉が適當だと思つていました。実は郷土科というのは、現場主義の教育というふうに言える。生活知を重んじるということは現場感覚を重んじると言えるのではないかと思ひます。

生活知に対して学問が生活から遊離してしまった傾向があるが、どうしてかというと、学問は厳密さ、正確さ、あるいは普遍性を重んじるために、体系的なものを確立する、できるだけ多くのものを一度にとらえようとしています。

ていた。学問とは典型的に言うと、お經、漢文の世界です。莫大な量のお經を理解するために、大変な知識が必要となる。しかし、それはさしあたり生活に必要な知識とはまったく違う知識です。ごく少數の人しか学べない。ほとんど外国语といっていい漢文を勉強する。それによって、大変重要な知識が得られるわけです。宗教的な真理の根本的なものがお經の中にあるのは確かですが、しかし、それが同時に権威を作るための学問といふ側面をもつてゐる。経典を学んで自由に語れるといふことで、指導する無条件の権利を与えられる。ですから、伝統的な学問はそういう面で権威主義的なものをはらみやすかったと思います。

一方、伝統的な生活知というものは、それぞれの地域の環境の中で民俗的な知識として育てられたわけです。が、それは、とかく閉ざされた狭い生活環境の中だけであてはまる知識であった。また、非個人的なものでもあった。個人が自分の力で学びとつていくよりも、共同体で伝承されていくものであつて、個人の創意、工夫というものにはあまり縁がなかつたと思ひます。

近代化と生活知

そういう中で、近代化は大きな変化をもたらしました。近代教育は、伝統的な学問とは違う、知識の伝達のあり方を育てようとした。近代国家の担い手である一般大衆、あらゆる人々にとって大事な知識を育てる。それが近代教育の理想がありました。単に、読み書き算術だけでなくて、広く社会や自然についての知識を与える、それが近代国家を支える市民にとって必要だという理念が近代教育の根本にあったと思います。当然、学問もそうした教育と結び付いて生活と密着したものにならなければならぬ。そういう理想をもつて近代の教育、学問は出発しない、という理想をもつて近代の教育、学問は出発しなかったと思います。

ところが実際に近代化が進んでいきますと、必ずしもそうはいかなかつた。むしろ、近代の学問がかえつてまた、生活知から遊離していくことが生じたのではないだ

お婆さんから、あるいは近所の人たちから日常的な知識と結び付いたところで、生活環境の中で伝えられてきた知識としての、お産の知識がなくなつて、かわりに、厚い本を買ってきて勉強しなければならない。お産、子育て、しつけ、すべてそのようになつてきています。そしてそれは大学の先生がテレビで話したり、あるいは難しい書物を書いたりと、そういうところから勉強しなければならない、そういうことになつてきました。できるだけ先生達も分かりやすい言葉で書こうとするわけですが、しかし、受け取る側にするとやはり、自分達の生活環境とは少し離れている、どこかに抽象化が働いている。なかなか我がものとはならない。身につかない知識になる傾向があると思います。

現代の若者の傾向というのは世界情勢については大変よく知っている。ニュースはよく見ていて。しかし、自分と友達の関係、あるいは夫婦同士の関係についてはどうしたらよいのかわからないことがたくさんあり、途方にくれてしまうというような傾向があります。

抽象的な知識によってふくらんだ頭と、しかし、体に

ろうか。我々が生活知の大切さということを訴えなければならない、生活感覚に密着した知識が必要なんだといふことを言わなくてはいけない理由は、伝統的な知識が生活から遊離していたという面と、近代のあるいは現代の我々が接している知識というものがまた生活から遊離している、そういう二面があるのでないかと思います。というのは、近代の学問はますます専門化し、抽象化していく。そして一般人から、手の届かないところへ遠く離れていく。先端的な知識ほど、そういうところへ進んでいくという、そういう性格をもつてていると思います。知識がますます複雑化し、生活の実感と結び付けるのが困難になります。たとえば、典型的のが、人間の体に関する事であります。現代の医療が我々にとって大変に問題であるのは、医療的な知識が我々に最も身近な自分の体に関する事であるにもかかわらず、我々の知識から離れたものになつてしまつていて。たとえば今、お産をするときに、女性はそのお産の知識を産婦人科の先生が書いた書物から、学ばなければなりません。自分が生活を共にして育ててもらつたお母さん、

結び付いた知識という面ではいささか貧しい人間が、現代人の特徴ではないでしょうか。これは、近代化が育てしまった知識が、生活知から離れていくということの現れかと思います。受験戦争というのもある意味ではそういうことと深い関係がある。そういう現代社会をお進めしていく最先端の知識に追いつくような人間を育てよう。あらゆる産業の場面で役立つ人間。そのためには難しい数学やら化学の知識を教える、その目標にそつて小学校からのカリキュラムが成り立つてくる。あるいはそれに足りないものは塾へ行つて学ばなければならない。生活知に根ざした教育をしようと思つてもどうしても、そういう生活知から遊離した学問のための受験勉強へとかわざるを得ない、そういうことがあります。

つまり、近代教育の発展とは、生活知を育てていく自發的な知識形成というものを子供に促していく、そういうことを目標としながらそれが実現できなくなつてしまつてゐる過程だったと思うわけです。

牧口常三郎の業績を考えしていくには、明治から大正にかけてしだいにそういう変換が起こつたという時代背景

をおさえておく必要があります。伝統的な学問から自由になつて、近代的な学問の理想が実現できるのではないだろうか、という希望に燃えていた。そういう時代から、次第に受験的な競争社会ができてきて、その中での教育になつていく。再び教育が生活から遊離していく、そういう方向へ発展していく時代の中で、牧口が仕事をしたと考える必要があります。

そういう時代の大きな流れがあつても、牧口は決して、自分の生活知重視の思想から離れることはありませんでした。従来、牧口の思想は、アメリカから入り大正時代に広まつたプラグマティズムの影響が強いといわれておりましたが、私はプラグマティズムの思想の影響というよりも明治初期の教育思想の影響、それは、ヨーロッパで育てられた近代教育思想によるものですが、その影響を重く見た方がいいと思います。牧口が北海道時代に、最も若くて柔軟な時代に吸収した、そうした教育思想が根っこになつてゐるようなのです。ペスタロッチとかスペンサーといった人々の教育思想だと思いますが、それが根っこになつてゐる。そこにもう、生活知重視の思想

があつたと思います。生活知重視の思想というのは決して牧口の独創ではなくて、近代の教育思想の中に太い流れとしてあるものなのです。

ですから、牧口だけではなくて、他にも似たような理想をもつて様々な試みを行つた教育家が近代にはたくさん出現しました。しかし、その中で、とりわけ牧口が目立つてゐるのは、先程申しました、現場からの発想という点において、たぶん、最も徹底した考え方をもつてゐるということは、現場の中で考えていくから自分の身についた知識になる、そういう知識を重んじるということですが、牧口は常に現場にいた。したがつて、その立場から離れようが無かつた、そういう生き方をした方だとうことです。

一時、教育現場を離れていたこともあります。生涯の大方を、小学校を中心とする教育現場に身を置いた。公立小学校といふのは現場感覚という点において、知識とか学問とか教育ということを現場の感覚でとらえるために、最もふさわしい場ではなかつたかと思います。た

とえば、医療の現場、大学教育の現場では、権威がものをいうというところがあります。たとえば大学のゼミで

いうと、外国語の知識を知つていれば、学生に文句を言われないというようなところがあるわけですけれども、小学校の現場といふのは権威を傘に自分を守ることがしにくいところではないでしょうか。それと同時に社会全体を見た場合、社会の階層的な秩序からいつて、一番現場的なものに近い。一番庶民的な世界だといえる。社会生活の一番基底的な場面といいましょうか、そういうものを普段から身近に感じている。そういうところが公立小学校という所ではなかつたかと思います。

大衆自立思想

しかも、牧口の場合は、若いときに自分の生地から旅立ちまして、自分自身の力で身を立てた。立身という言葉が誠に身近に感じられた時代、そして、国の独立と個人の独立ということが大変に重要だということを多くの国民が感じていた時代に、しかも、自らの努力ですぐれた知識形成をした、そういう経験をたどつた。ですから、

自らの努力で自發的に学ぶことが、いかに尊いことであるか、いかに素晴らしいことであるかということを体全体で知つていたということだと思います。

現場からの発想、しかも特に自立ということが、現場において非常に大切であると感じつゝいた、そういうところからの発想が牧口の思想、近代の生活知を重んじる思想の中でも、特に現場主義、そして自立するための知識、自立しながらの知識形成ということを強く打ち出された思想が出てきた背景だと思います。

そこで、牧口の生活知重視思想というものの特徴として、大衆自立思想と結び付いているということがあげられます。これが、今でも特に大きな魅力をもつてゐる部分だと思います。当然、上から与えられる知識を否定することから、権威主義の否定が起ります。自分で学び身につけることが重んじられております。

『教授の統合中心としての郷土科研究』の中の面白い例は、西南戦争の英雄である谷村計介という人についての話です。この人は、修身科の教科書で賊軍に閉じ込められた官軍を救つた使者として、英雄的な人物として取り

上げられているわけですが、それに対して大変に辛口の批評をしています。そういうふうな人物を模範的な人間だというけれども、それが子供達に分かるであろうか。

その場合に責任を果たすとはどういうことか、皆のため役立つとはどういうことか。そういうことを体で覚えることのほうが大切ではなかろうか。したがって、戦争について歴史的知識を教えるよりも、戦争の中での英雄的行為について言葉で教えて頭で覚えさせるよりも、まず戦争ごっこでもやらせたらどうか。こういうふうに言っているわけです。絶対的な忠誠が必要であるかどうかということを、子供が自分で判断しなければならない。

その場合にまず自分たちの身の回りで、ゲームをやってみたほうが役に立つのではないか。そういう批判をしております。大変、今でも魅力がある考え方、大衆自身による学習行動、そして、身の回りの環境の変革、そういうことが目指されていると思います。

私が注目したい点は、これが、実は大乗仏教の思想と深い結び付きがあるということです。つまり大乗仏教というものは、もともと大衆のための仏教、あるいは、大衆

による仏教という性格を持つていたということです。これは仏教の中の大衆主義といつてよいと思います。一般に、宗教的な真理というのは大変深いものであるから、すべての人が分かるはずはない。したがって、少数の選ばれた人だけが、最も深い真理を獲得できるんだという、ある意味では、当然のエリート主義がある。一方で、最も大事な宗教的真理というのは、あらゆる人がつかむことができる。すべての人が同じ高さにいかないとしても、人生にとっての最初の重要なポイントというのは、すべての人が平等につかまえることができる。だから、すべての人が平等に参加していく必要がある。そういう考え方がある。こういう、エリート主義に対抗して大衆主義を打ち出していくこうという傾向がいつも出てくる。

仏教の中では、原始仏教というのは、どちらかという方がある。こういう、エリート主義に向かう傾向があり、それに対して大乗仏教とは大衆主義、菩薩思想がありますが、つまり、あらゆる人のための仏教、本当の真理から疎外される人、除外される人があつてはならない、そういう仏教が大乗仏教だと思います。その中でも特に法華経の中には大衆

自立の思想が色濃くあると思います。地涌の菩薩というものが出てまいりますが、それは大地に根ざした、生活現場を表す大地と同じ世界で生きている仏教、そういうところで仏教を守っていく地涌の菩薩というイメージです。大乗仏教の中で特に法華経の思想が、なぜ、近代の日本でこれほど大きな力を持つたかというと、一つには地涌の菩薩というイメージに代表されるような大衆主義が近代にふさわしい思想であるからだと言えると思います。つまり、少数の人が社会を指導していけばいいという時代ではなく、すべての民衆が自立して、社会に対する責任を負っていく、これが民主主義の理念であると思いますが、それが宗教でいうと大衆主義の思想と重なり合う点が多いからだという理由です。

日本で近代、法華經、あるいは日蓮系の宗教というものが広まった一九二〇年代から七〇年代は、最も激しい変革と経済成長の時期ですが、それはまた近代日本における新しい大衆主義、あるいは大衆自立の思想の時代といふふうにも言えます。昭和時代というのは実は法華經の時代であったと言えるかもしない。宗教的に言うと

それほど法華系の新宗教あるいは日蓮系の新宗教が巨大な力を持った。ですから、教育者であつた牧口が日蓮正宗に関わり合つたというのは、ある意味で必然性を持っている。つまり、最も大衆の生活に密着した教育を実現しようという志を持つた方が、日本の宗教伝統の中で、最も大衆主義的な思想の傾向の強い流れの一つである日蓮正宗に共鳴されたというのは、ある意味で自然だったと思うわけです。

そういうわけで、牧口常三郎の思想と実践は、生活知識思想、特に大衆の自立を重んじるという点に特徴がある。それは牧口が少年期を迎えた明治初年の日本の思想界の傾向でもあるし、同時に創価教育学会が出来てゐる、大正、昭和初期の時代の傾向でもあつたと考えます。今、牧口が日蓮正宗に共鳴したのは自然だったと申しましたが、しかし、なぜ、教育運動から宗教運動へ転身されたか。なぜ創価教育学会が宗教運動に向かつていつたか。あるいは牧口個人にしてみると、なぜ、教育思想家、それも近代の啓蒙主義に近い立場にいた教育思想家が、宗教思想家・宗教運動家として活躍するようになつ

たかは、大衆主義としての共通点ということだけからの説明では足りないのではないかと思います。そこで、『創価教育学体系』をどういうふうに読むかという、私なりの宗教的な読み方ですが、有用性ということと関わりがあるのではないかと見当をつけているわけあります。

従来、牧口の宗教との出会いは、三谷素啓という日蓮正宗の先達と会われたこと、あるいは、その前後にお子さんを亡くされたということ、あるいは教育界における不如意等々いろいろな理由があげられておりました。それぞれに重要な理由であると思いますが、もう一つ重要な理由は、時代の転換、大正デモクラシーと呼ばれた時代が終息に向かって、民主主義に期待をかけることが困難になる時代であったということがあります。そして、さらにもう一つ重要な点として牧口の思想の内在的発展というか、従来の牧口思想が、まだ解決し得ない問題を解決しようとする過程で、必然的に宗教と出会われたという面があるのではないかと考えるのであります。

明治の一〇年代二〇年代というのは、日本は最も近代

の明るい希望を持っていた。特に自由民権運動が挫折する前は、あちこちで国民が勝手に理想を唱えることがでいた、下からのエネルギーがボンボン出てきた時代です。そういう時代に育ち、自分の力で自己形成をされた牧口ですから、教育に取り組までも、これから日本の公教育ができるいくときに、大きな期待を持ちながら公教育の実践に取り組んだわけです。しかし、大正時代になると、大体近代日本の公教育というものが固まつてくる。そして、学歴主義ができあがつてくる。そういう時代に牧口の学校教育者としての時代は、終わりを迎える、そういう過程を思い浮かべていただきたいと思います。

始めに持っていた公教育への期待が、ある意味では挫折した。たとえば郷土科というのを唱えられた、しかしそれは実現しなかった。地理教育の理想を唱えた、しかし、現場の地理教育はまったく違うものになってしまった。そういう中で、退職の時点を迎えた、そういうことがあります。ですから、『創価教育学体系』では、近代の日本の教育体制の全体に対する批判をしていくわけがありますが、『創価教育学体系』の提案が、実現す

る見通しは大変薄かった。時代の中では小さな声であるということを、もちろん承知の上でそういう本を出したと思うわけです。そうしてみると、教育運動では足りなかつた、教育運動に代わつてもう一つ強いインパクトを持つ運動にひかれる理由が十分にあつたと思います。ですから、創価教育学会は、教育運動でもあると同時に、宗教運動でもあつた。運動としてみるとどういえますし、思想として見ると教育思想だけでは何か足りないものがあつた。やはり宗教的なものまで踏み込まなければならないような必然性があつたのではないかと、考えるわけです。

有用性を超えて

なぜならば、生活知を重んじるということは、どういふ生活知が大事なのか、よい生活知とは何なのか、よい人生とは何なのか、という問い合わせ自然ぶつかるからであります。牧口は初めから、幸福な生活を問題にしていましたが、正面から取り組む、徹底的な解決を与える、そういう必要を次第に感じるようになつたのではないかと

思います。生活に密着した知識とは何だろうか。さしあたり、生活に役立つ知識というふうに思われた。生活に役立つということで、大体のことは解決できそうだと考えられたと思います。『人生地理学』においても、郷土科研究についての書物でも、子供に対する質問として、これはどう役立ちますか、という問い合わせを重視しています。つまり、有用性であります。『創価教育学体系』の言葉で言うと「利」であります。始めから「利」の観点から知識を形成することが大事なんだ、牧口は考えていたと思います。

しかし、『創価教育学体系』で正面から取り組んだのは、その先ではなかつたか。つまり有用性を超えた価値規準とは何か、「利」を超える基準とは何であろうか、という問題ではなかつたかと考えるわけです。これが価値論であります。価値論のユニークさは従来「真、善、美」の「真」に代わつて「利」という価値を入れられた点、「美、利、善」という価値の規準を立てられたところにあるとされてまいりました。したがつて「真」に対して「利」を重んじるということが、『創価教育学体系』の

非常に重要な特徴だとされています。

しかし、牧口思想の展開からいうと、もう一つ違った視点があると思うわけです。つまり、「利」という点では『人生地理学』もそうであるし、『郷土科研究』もそ『価値論の特徴は、「利」とは「善」よりも低い値であると設定している。「美」よりも「利」の方が上だ。しかし、何より「善」こそ大事だとなつていると見えます。ですから価値の序列がはつきりしている。「善」を目指す教育でなければならない。「利」では足りないと、そういうことがあります。

「利」というのは個人的な価値ですが、「善」というのは社会的な価値であります。ですから道德性の面において、一段高いもの、自分でなくて、他者も考慮した価値判断ができる。さらに、「善」の中にも「小善」もあれば「大善」もある。それもまた見分けることができなければならぬ。価値を創造していくためには、これらを見極めなければならない。これは『創価教育学体系』以後、ますます強調されていることだと思います。

思索が進んでいく。これが昭和期の牧口思想の展開です。いずれも「有用性を超えて」という標語でまとめることができるものではないかと思います。

したがって、ここでは有用性を超えた価値として少なくとも一つの指針がある。一つは、社会的価値を重んじるべきであるということです。『創価教育学体系』の中には、はつきり書いてある。昭和の初期の国民生活の中でいかに社会倫理が頽廃しているか、責任感のない子供たちが育つ傾向にあるか、ということに対して、牧口は様々な体験を土台にして述べている。社会的な責任観という点から価値論を展開している。

これは、現在の創価学会における積極的な社会参加の姿勢とともに深い関係があります。牧口の時代が、現代の七〇年代以降の創価学会に直接つながっています。宗教は個人の救いを大事にすべきだと考えれば、そんなに社会参加しなくていいわけですが、創価学会は、日本の中でも最も社会参加に熱心な教団で、それは牧口思想の中に原点があると言つていいのではないかと思ひます。ところが、創価教育学会が昭和一〇年頃から成

実際には「大善」生活というのは、日蓮正宗の信仰、宗教的な生き方ということになります。ですから、客観的な立場から見ると、牧口は宗教に入ってしまったわから、学問から飛び越えてしまつたと判断できる。日蓮正宗の信仰をもたない人から見ると、ここはもう我々の領分ではないと、別のところに行つてしまつた、と言えるかもしれません。しかし、我々は改めて考え方直してみる必要があります。

価値創造ということは、「利」について重んじるという従来の生活知、有用性を重んじるということを超えて、さらに「善」の価値へと進んでいく生活を促しています。それは、社会倫理的な側面を持つている。牧口が大正時代にデュルケーム等の社会学思想から学んだことでありますし、さらに、宗教ともかかわってくる。社会倫理と宗教は深い関係があるところです。一方で、社会学的な方面から、社会倫理性、道徳性の必要ということを感じられるようになり強調するようになる。他方で、日蓮正宗との接触から最高価値としての「大善」生活というものを唱えられるようになつた。その両者がからみ合つて

長していく過程では、必ずしも社会参加という方向へ向かわないで日蓮正宗の方向へますます純化していく。個人の救いという方向へ純化していく。ここでは日蓮正宗が絶対的な価値であつて、他の宗教は間違つたものであるし、そういうものに従つている人は間違つた人生を送つていて。そういうような方向もあつた。これはある意味では、近代的な宗教の多元性とか宗教の自由といふものには、部分的に矛盾する面がある。他宗教の価値を認めないと、自分の宗教の自由は認められないということになつて、近代的な民主主義と齟齬をきたす可能性があるわけですが、そういう方向もこの時代に出てきた。

それが、昭和期の創価教育学会の展開であり、牧口思想の展開があつたと思います。この二つの面を今後どのように創価学会の中で展開していくのであらうかが私などには興味のあるところであります。有用性を超えて、牧口が展開しようとした昭和期の思想には大きな可能性があると同時に、ある意味まだ解決されていない問題もある。つまり、有用性を超えた価値をどのようにして

高めていくことができるのか。しかも、民主主義的な多元的な社会の中で、それが宗教とどうかわっていくのか。宗教は絶対的なものを追求するわけありますが、それと一緒に、多元的な民主主義社会の価値を認めていくことができるであろうか、という課題があります。

また、言い換えると「大善」生活とは、ただ一つの宗教によってしか、実現できないものであろうか。そういう問題でもあるうかと思います。多様性、共生という面と、宗教的な信仰はどのように調和することができるのであろうか。日蓮正宗、創価学会だけではなくて、キリスト教やイスラムのように、排他主義的な思想が強い宗教にとっては非常に難しい問題だと思います。それが早くから牧口思想の中で課題となっていたと思います。それは単に一宗教の問題ではなくて、もしかすると現在の宗教が抱えている最も大きな問題の一つではないかと思うわけです。

しかし、創価学会の場合には大衆自立思想という基盤がある。これはもちろん、牧口の生涯をみれば、そこから外れようが無かつたという、明々白々な思想的な立場運動——牧口常三郎の教育思想と信仰（河合隼雄他編『岩波講座 宗教と科学五 宗教と社会科学』岩波書店、一九九二年）の論旨を發展させたものである。

（しまぞの すすむ・東京大学助教授）

があると思います。生活知の重要性が民主主義社会における個人の責任という観念に結び付いています。自由とか人権とか理性という理念から外れようがない。宗教が絶対的なものを見失うと、宗教としての力を失うわけになりますが、そういうものと、民主的大衆自立思想がどのように共存し、両立していくか。ますます現代においてそのことの難しさが痛感される時代であります。西洋の民主主義とイスラム教のファンダメンタリズムとの対立。あるいは伝統に基づく宗教的な生活と近代の効率主義や孤立分断に向かいがちな生活、市場経済、資本主義そのものがそういう可能性を孕んでいるという矛盾。こうした対立や矛盾の解決の難しさが世界中で感じられていました。創価学会の場合は牧口常三郎の大変豊かな思索と実践と人生の軌跡という財産を持つておられるので、それを素材として新しい道を切り開いていかれることを期待したいと思います。

〔附記〕本稿は、一九九三年五月二十九日に創価学会神奈川文化会館で行われた「牧口初代会長生誕記念講演会」に